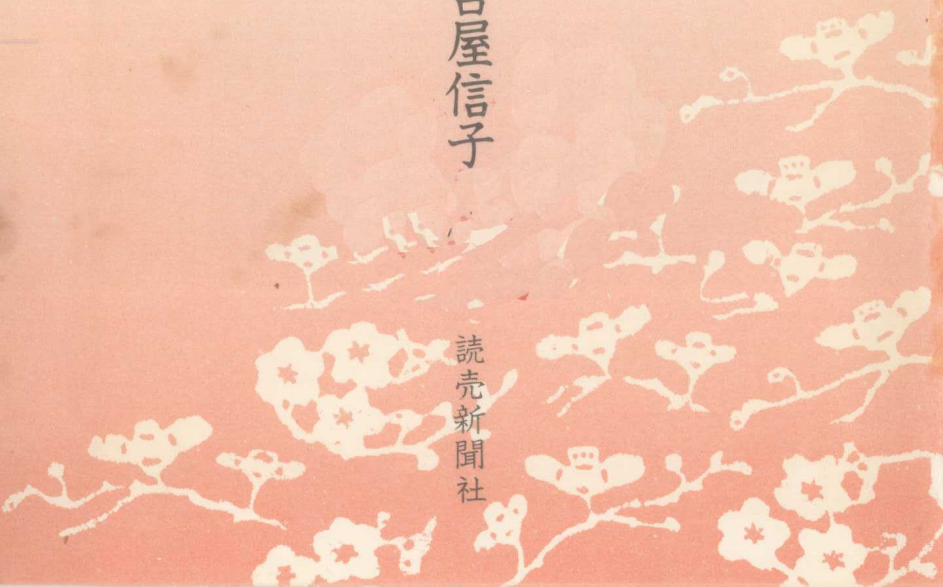


隨筆
私の見た美人たち

吉屋信子

読売新聞社



隨筆・私の見た美人たち

昭和四十四年十一月十日第一刷

著者 吉屋信子

発行者 二宮信親

発行所 読売新聞社

東京都中央区銀座三ノ二ノ一 千一〇四

大阪市北区野崎町七七 千五三〇

北九州市小倉区明和町一ノ二 千八〇二

印刷所 堀内印刷所

製本所 協和製本株式会社

定価 五五〇円

私の見た美人たち・目次

梨本伊都子の日記	7
不死鳥・中上川あき フエニックス	26
尼寺巡礼	43
藤蔭静樹	61
花柳寿美	72
古河不二子	80
岡田 静(万竜)	86
入江たか子	101
栗島すみ子	111
永遠の文学少女・山田順子	118

北村兼子の功名心	131
女流俳人・はぎ女事件	158
平塚らいてう小伝	183
銀の煙管とダンス	204
沈丁花とちらし鮓	212
沈丁花匂う頃	221
ノーベル文学賞作家の家	225
わが日記物語	234
郷愁	
小さい駅	247

桐の簞笥

251

祖先は祖先、私は私

254

たべものの話は尽きず

ただの水

259

季節の食味

263

たべもの運

266

随筆・私の見た美人たち

梨本伊都子の日記

菊池幽芳は私の少女の頃の家庭小説の大家で、当時の東京日日新聞（現毎日新聞）にたびたび長篇が連載されていた。私がいつしか生意気な文学少女の女学生になった頃は、その幽芳の作品に不遜な批判などを持つようにもなったが、その幽芳の自伝的回想記を読んだ時は、幽芳先生をちょっと羨望した。

それは——幽芳がかつてフランス留学のため渡仏の際、船に梨本宮妃殿下がいらっして、妃殿下の御愛読なさった小説『己が罪』の作者が同船と聞かれて、その作者を御引見、いろいろ御下問の榮に浴したという自伝を飾る一節に「まアすてき」と思ったからである。

しかもその妃殿下がたいへん美貌の妃なのを、その頃の皇族画報のお写真で、私は知っ

ていたから、幽芳先生を運のいい作家だと羨うらやんだのである。

そして梨本宮妃殿下が小説類をお読みになり、作家から文学談をお聞きになるようなお氣質を皇族妃として珍しいことに感じ入ったのも——現人神あらひとがみとして天皇制華やかに、皇族も雲の上はるかに高く菊のカーテンにへだてられた時代で、現今の感覚とまるでちがうからだった。

ところが、私が父の任地の宇都宮市に居た時、同じ街にその妃殿下がお棲すみになることになった。それは同市所在の師団の旅団長に梨本宮守正王が御赴任となったからである。まもなくその梨本邸に県知事夫人や県庁の役人の妻たちがお招きを受ける日があった。私の母も白襟紋しろえり付きの礼装で緊張して出かけた。そして宮家御紋の十四弁じゅうべんの裏菊を銀箔ぎんぱくで押した女持の小扇を戴いて帰った母は、妃殿下のお美しさを讃たえることしきりだった。

宇都宮から日帰りで遊びに行ける日光は、紅葉の季節には遊覧客が押すな押すあの賑わいだが、早春の日光の山々に、——つつじに似て素朴なひなびた色の花が、葉のない枯木のような灌木かんぼくの枝に簪かんざしのごとくに咲くヤシオの花盛りには、その頃あまり見に来る人もなかった。

私は兄や弟と日曜日にその花ざかりを眺めに出かけて、霧降の滝へ行く道へさしかかると、向うからお供を従えたいかにも貴族的な紳士と夫人が、その道を静かに降りて来られる姿に接した。その紳士はグレイのモーニングに同色の山高帽、八字髭の先のはね上った口髭。夫人は気品備わる美貌、まだ春寒の日光で黒天鵝絨のコート、当時流行の七分三分に髪を分けられた髪形……まことに粹なよそおいのお二人こそ梨本宮殿下と妃殿下——同じ宇都宮に棲む私たちにはすぐわかった。

道の端っこに退いてお辞儀をすると、殿下は山高帽の廂に一瞬手をかけられ、妃は軽く会釈された。まさしく民主的な宮さま御夫妻だった。

日曜日には軍服をさらりと脱がれてグレイのモーニングの殿下、妃の瀟洒な令夫人姿を私たちはいつまでも見送って立った。「外国へたびたび行かれたからハイカラだな」兄は知ったかぶりを言った。

——その私の十代の日からの年月が積み重なったのちに、私がふたたびその美しき妃にお会いした時は、もうこの国の皇族は、秩父、高松、三笠の直宮以外は、臣籍降下して、皇族でなくて梨本伊都子夫人であり、そしてすでに未亡人となっていた。かつて妃殿

下時代にも菊池幽芳を召されただけに、女の小説家の私にも迷惑がられることなく打ちつけてさまざま語られたなかに、明治三十三年十一月、梨本宮家へ入輿じめよ以来の日記を持たれることを知ったので、私の好奇心はむずむずとして、ついに拝借してしまったのは四年前の秋だった。

日記は墨の文字美しくしるされた和紙綴とじの五巻だった。それからの日夜わたくしはその日記をひたむきに読みふけて驚歎した。

明治、大正、昭和の三代の天皇を中心に、皇族妃としての生活記録はさながら一大長篇の宮廷小説の感じで、古代の源氏物語以外近代では類のない文献の気がした。

——明治十五年二月二日イタリローマにて誕生、それにちなんで伊都子と命名、父君は伊太利全權公使鍋島直大なべしまなおひろ侯爵、母君榮子は樞大納言広橋家（伯爵）の出、生後一年に足らぬうちイタリ婦人の乳母に抱かれて父母と帰国。赤坂溜池の空に聳そびえた純洋風建築の鍋島邸に育つ。その邸には明治の天皇の行幸あり、続いて皇后陛下、皇太后の行啓の日、伊都子姫が琴曲彈奏、皇后より人形を賜わったのが少女時代の略歴、やがて華族女学校の学業を終えられ、梨本宮家へ入輿の日から始まる日記の省略ばつすい拔萃を許されて紹介すると——

明治三十三年十一月二十八日

早朝、宮家よりの使者と儀装馬車さしまわされ儀仗兵共に着、家中一同に見送られ門出、一生帰らぬ邸と思うと胸ふさがる心地で馬車に乗る。鍋島家より皇室に上るは有難きこと祖先の名を汚すまじく何事も辛抱第一とかねて言われ、責任重大なること身にしみ、そればかり思い詰めて宮中賢所に向う。

——式後披露宴は四日間連続、十二月四日出発、伊勢神宮に成婚報告、京都の宮家先代の墓へ参拝後、帰京、宮邸へ落着かれてからの日記には感想が多い。

十二月十七日。宮様は思いやり深く有難し。されど今日までめぐるしき旅の日を送り帰りてここが終生のわが家と思えどあまりにも変化の大きいなるに呆然とする有様、普通新婚当座とはただうきうきと楽しきことと思ひ居しにただ毎日おそろしきばかり、することなす事あまりにも今までとちがい頭からおさえつけられ束縛されおどおどして暮す、あまり出世して段ちがいの身分というものはけっして楽しきものならず、何事もおのを棄てて従い行かねばと覚悟を定む。

——これはたいへん悲観的であるが、その当時のうら若き妃の心境では、鍋島家の家庭は外交官だった父と、氣質闊達、語学に長じて社交的な母との雰囲気で、当時の貴族としては進歩した自由主義的欧化の空氣に満ちたなかから、いきなり京都古典風の宮家に入ら

れ、宮邸古参の老女と四、五人の侍女、宮家事務官、属官たち四、五名に従者五、六名の運営

する邸の、鹿爪しかづめらしくものしい生活では、妃はわが手で傍の品を引き寄せたくても端然とかまえて、いちいち侍女に命じるといってお妃作法に従うのが愚おろかしく苦痛で、守正王のお傍そばに仕えた古参の老女格からは、ちょっと姑しゅうとめめいた眼を向けられたと説明された。

明治三十四年十一月四日。第一王女を分嬖まき。方子まさこと命名。なるべくわが母乳にて育てなければ、当分付ける乳母は平塚の小林ためという。

——二十歳で母となられた。やがて守正王は仏国留学の途につかれた。

明治三十六年三月二十八日。宮を横浜までお見送り申し上げ。仏国船シドニー号にて臼井属官とお附武官山根少佐お供なり。三カ年御留学は伊都子には心細きかぎりなれど、方子の成長を見つとお留守をまもるとす。

——印度洋の港々から宮は絵葉書の便りを妃に送られたと、その後の日記にある。

明治三十七年二月五日。かねて露国との風雲あやしく、それとなく赤十字社特志看護婦人会名譽会員の各皇族妃は日赤病院に集まりて救急法、或は繻帶巻きの教授を受くることとなり、日赤におもむき戦時に於ける規則心得など講義あり。その夕刻招魂社の広場に多くの馬つながれ人も多数集合せりと伝わる。万一大戦争とならば海外にいます宮様はいかになさるや、その他陸海軍人のこと

まこと心に痛む。

——そしてついに日露国交断絶の号外が出る。

同年四月三日。横浜入港のエンプレス・オブ・インジャ号にて明日夕五時宮様御帰国との電報あり。支度しお待ちする。

同年六月二十三日。宮様満州の第二軍司令部に（奥司令官配下）御出征ときまる。お供はお附武官山田少佐、香田属官、馬二頭、馬丁三名。

このたびの戦いはいかなるべし。宮と結婚後三年目に仏国御留学、引き続き御出征遊ばし万一このままお別れすることともならば方子と共にこれからの生涯をさまざま案じて切なし。

——戦場までたくさんのお供つきの皇族軍人の妃も、赤紙一枚で連れて行かれる庶民の一兵卒の妻も同じ切なさだった。

同年七月十五日。宮は無事ダルニー（筆者註、大連）御上陸との御報知来る。おいおい戦地の負傷兵帰還、日赤繻帶巻きいそがしく慰問袋も造りて送り出す。戦況は日本大勝利という事なれどこの戦いはいつ果つべきかと憂う。

宮様御出征の留守中のお見舞いにと皇后陛下にはお心こもりし御菓子お重に御料理賜わる。ただただ有難く一同に分け与える。

同年八月十五日。電報にて「梨本宮殿下御発病大腸カタル——」の報、先年台湾にて北白川宮様御薨去あらせられた事思ひ出され身の寒けさを覚ゆ。一日も早く御恢復を祈り陸軍省と打ち合せ日高事務官は属官と御見舞いに戦地におもむく。

——のち宮は戦場より別府に御転地——やがて平和克復の明治三十九年の八月に、戦中中断の仏国留学を続けに出立され、その翌年四月第二王女（則子）御誕生——フランスの陸大留学を終った宮は帰途に妃と欧州巡遊の予定を立てられた。

妃殿下は四十二年一月十三日小雪ふる日、式部官、御用係、医師、属官お供で日本郵船賀茂丸にて出立、その航海中同船の『己が罪』の作者幽芳を引見されたのだ——こうしたお妃日記明治の巻は、明治大帝の印象、その御大葬その他、まことに興趣尽きぬ記述があるが、割愛して大正の巻を抜き書きする。

大正二年八月三十一日。宮は本日、任陸軍少将、補歩兵第二十二旅団長、任地宇都宮におもむかる。

——ここから妃の宇都宮時代の日記は東京本邸よりものびやかな御生活振りが記され、日光へよく遊ばれ、東京から学習院在学中の方子、則子両王女が時折訪れられたりで、入